

『ゲオルク・トラークル』

オットー・バージル

田中 豊 訳

(I) トラークルとトラークル・解釈

多くの鏡や鏡像の時代、また論究的想像力と参考文献過剰のアレクサンドリア的われわれの時代、ゲオルク・トラークルに関する研究も盛んになった。彼の作品は、最も純粋な抒情詩から成立しており、著しく範囲が狭く、多くが厭世的発語の中で本来単調だが、神話的魔術的美しさを秘めている。それは読者を底知れぬ深淵に導く〈彼岸的〉美であり、ただそれによってのみ、トラークルの詩作による影響が解明されるであろう。

1964年11月3日現在で〔オットー・バージルのこの伝記的記述の正式な表題は「自己証言と写真記録の中のゲオルク・トラークル」となっており1965年7月初版が出た（訳者注）〕トラークルの夭折以来半世紀が経過した。（彼は――まったく理解しがたいことだが――生存していてもやっと77才なのである）。しかし彼の墓の上には、今では注釈的文献のピラミッドが聳え立っている。20年代初期には、解明しがたい諸状況のもとでこの世を去った者の名声が、初めてその頭を擡げていた。この名声は、直ちにドイツ語本国の境界を越えたのである。外国の先駆者として、1917年チェコ語に翻訳された一冊のトラークル詩集が出版された。著者の死後ドイツ語でもようやく公刊された作品『夢の中のゼバスチャン』が、1924年同様にチェコ語で続いた。2年後、トラークルの保護者で父親的な友人であるルートヴィヒ・フォン・フィッカーが、最初のトラークル追憶書を編集した。アンソロジーや定期刊行誌におけるトラークル詩のフランス語、英語、ルーマニア語の翻訳は、センセーションを巻き起こした――この真に特異な詩的現象に対するセンセーションを。最初の、とりあえず1926年迄にすぎない文献解題的概観を、エルンスト・バイエルタールが、ゲオルク・トラークルの抒情詩に関する論文の枠内でおこなった。ハインリヒ・エラーマンとヴェルナー・マイクネヒトが、次の文献解題者だった。

トラークルが27才で生涯を終わっていなければ、さらに言語芸術の如何なる頂上まで登りつめていたことであろう、と問うのは無意味なことに思える。狂気がヘルダーリンの精神を包み込むことがあれほど早くなかったならば、トラークルと本質的に近似していたその詩作や哲学は、如何なる最終的成果に達したことであろう、と問うことが同じく無意味であるように。『ヘーリアン』以上のもの、パトモス以上のものが出来ることになっただろうか？トラークルへの追悼の辞で、アルベルト・エ

ーレンシュタインはそのことを述べている。トラークルの最後の詩『グローデク』は、ほかの詩とほとんど違いがない、「高度の意味あいにおいて、彼という人間は矯正不能だった」。後期層の陰鬱的、予言的散文幻視のみが、エーレンシュタインに従えば、一つの力強い詩的未来を予感させるのである。

トラークルの短い地上生活は、外面的事件においては貧しいが、そうであるだけに、内面的体験においては一層豊かである。思春期とともに、大きな精神的緊張がこの生の中で場所を占め始める。その劇的な進行ぶりは、伝記作者が心的舞台へ赴いても、ただ跡をなぞることが出来るにすぎない。そこでは主に、詩人に関して言われることが進行しているからである。成熟しつつあるトラークルの生は、精神医学的治療の表現を使えば、《心理劇》と名付けることが出来よう。

区別できぬ統一として、また厳密に自閉された体系として現れるトラークルの生活と詩作の両者の中では、心的要素が支配的である。このことが、トラークル解釈が一つの似通った錬金術性を示す理由であろう。今世紀のほとんど誰にも引けを取らぬ詩人に関して、多くのことが、様々な立場から揣摩憶測されてきた。トラークル世界の探求に対する最も本質的貢献は、神学者、精神医学者、著作家たちから生まれている。その際、神学的解釈は、まるで死者の魂をなお永劫の罰から救い出すことが肝要であるかのように、熱心な努力を払い、この作品を引き受けたのである。

ある程度は伝統から、トラークル解釈は、一種の信仰共同体、すなわちトラークル教会（この言葉は皮肉を込めているわけではないが）を形成する人々の手に落ちた。解釈者や注釈者の階級制度を持つトラークル教会は、ただ単にトラークル研究における優位さばかりでなく、判断の不可謬性と正教の威光をも要求した。要するに詩人は、根本的には形而上的記念碑管理の手に帰した。そして詩人の荒々しい素材的世俗的実存や作品の病因も、故意に昇華し、あるいは敬虔の煙幕で覆うことが試みられた。トラークル像は、この信者たちによって記念碑管理教会の中で確立され、今や、銀色その他トラークル色に輝く聖像のように、薫香の煙に包まれながら、われわれを見おろしている。

そのような教義的精神共同体の内部には、もちろん異なる方向、あるいは宗派が存在する――われわれがフロイトやカール・クラウス文献の中でも出会うような宗派である。そこで一方は、エルゼ・ラスカー・シューラーが「彼はおそらくマルチン・ルターであった」と述べたトラークルを、教會的、旧教的視野の中へ押しやり、他方は、トラークルの存在と詩作の古代的、修道士風なものを強調し、彼の肖像を再び地下墓所キリスト教の神秘的な明滅する光の中へ沈める。前者も後者も、トラ-

クルを宗教的人間——それは疑いのないことだった——あるいは特に《キリスト的人間》として記述する努力において軌を一にする。これに対して、その哲学がオーストリア人トラークルの抒情的作品との精神的親近性を囃されたマルティン・ハイデッガーは、ビューラーヘーエでの講演で（《ゲオルク・トラークル、詩のある解釈》）次のような疑問を述べた。「トラークルの詩作品は、如何なる範囲で、また如何なる意味で、キリスト的に語っているのか。詩人はどの様なあり方で〈キリスト者〉であったのか。トラークルの詩作品で、そしてまた一般に〈キリスト教的〉〈キリスト教界〉〈キリスト教精神〉〈キリスト教信仰〉は何を意味するのか」——こういったすべては、本質的問いを含んでいよう。その解明には熟考が必要である、とハイデッガーは続ける。「この熟考にとって、形而上学的神学の概念も、教會的神学の概念も十分ではない」。そしてゲオルク・トラークルの最後の幻覚を、言語構造的にまた実存的に開示し、あるいは解読する試みの中で、この哲学者はさらに探求を進める。「トラークル詩のキリスト性に関する判断には、とりわけ最後の二つの詩作品『嘆き』と『グローデク』を考慮しなければなるまい。それはこう問わねばならないであろう。どうして詩人はここで、最後の発語の極度の窮境の中で、神に呼びかけないのか？詩人がそれほど確固たるキリスト者であるならば、何故キリストに呼びかけないのか？」それどころか、何故——とわれわれも問う——トラークル（とわれわれ）には、キリストの代わりにまさしく妹（グレートル）の像が現れるのか？〈嵐の憂鬱の妹よ／見よ 不安げな小舟が沈みゆく／星空のもと／夜の沈黙する顔の下で。——妹の影が沈黙する杜を漂いゆく／勇士らの霊と血を流すこうべに会釈しながら・・・〉われわれは再びハイデッガーを引用する。「何故〈永遠〉がここでは〈氷の大波〉と言われるのか？これはキリスト的に考えられているのか？これは決してキリスト的絶望ではないのである。」その通り、付言すれば、これはまさしく虚無的絶望なのである。これは空虚からの骨髓を揺るがす叫びであり、無——あるいは狂気——への沈下を前にして、妹の無傷の存在へとおのれを救済する試みなのである。〈人間の金色の肖像を／永遠という／氷の大波が呑込むだろう。／おそろしい暗礁で／紫の肉体が砕け散る——街路はすべて黒い腐敗のなかへ注ぎ込む・・・力強い苦しみがいま精神の熱い炎を育む／生まれていない孫たちを。〉[このわれわれの引用句は、すべての論文の場合と同様に、インスブルック時代のトラークルの親友の一人、カール・レックの配列原理に従っている。レックは、詩人の死後5年を経て初めて出版された詩全集版（〈詩作品集〉ライプチヒ 1919年）の面倒もみている。この原理は、後のあらゆる全集版、ツヴィッカウ 1928年とザルツブルグ 1938年以降、において守られている。しかし今日で

は人も知るように、表題のついたグループによるレックの配列と分類は、トラークルとはほとんど関わりがない。ゲッチンゲン大学独語独文学研究室によって準備されている歴史的、批判的版は、まだ待ち望まれる段階だが、一つ一つの詩の正確な原典史とともに、その最終的な年代順も明らかにするであろう。(原注)] [ヴァルター・キリーとハンス・スツクレナル編の歴史的、批判的版は、2巻本としてトラークルの全作品、遺稿、手紙、その他トラークルの生涯に関する記録や証言、またトラークル宛の手紙やトラークルをめぐる手紙などを含み、〈ゲオルク・トラークル 詩作品と手紙〉の表題で、1969年3月出版された。(訳注)] この対立は、一般に妥当するトラークル像をめぐる争いが、すなわち嵐のようなこのアイコン像制作の争いが、まだまだ決着していないことを示している。

形而上的トラークル崇拜の特殊性は、部分的には、詩人がその生涯の最後の2年間、ある誠実な人間の援助で、インスブルックの半月刊誌《ブレンナー》(1910 - 1954)の影響圏内に入ったことに由来する。《ブレンナー》の創始者また発行者として、トラークルの最も重要な詩を初めて掲載したのは、ほかならぬあの寛大なルートヴィヒ・フォン・フィッカーだったが、当時《ブレンナー》は、《嵐》や《行動》といったタイプの、表現主義的文芸アヴァンギャルドの小さな好戦的雑誌だった。《ブレンナー》は、大反動的オーストリア的、旧教的地方に距離をおき、ヨーロッパの広い世界を目指していたが、この違いが、その声に独特の力を与えていた。(その理由としては、カール・クラウスの影響下で、人の魂を殺ぎ、また人の魂を奪いさる技術文明に対する拒絶が、大都会の定期刊行誌よりも、ここでは一層鋭く、また断固として定言化されたからでもある。) [カール・クラウスは、人に恐れられた時評家で、その言葉は君主国の国境を越え遥か遠方まで通じたが、《炬火》の中で、《ブレンナー》に関し次のような文章を公表した。「オーストリアでたった一つの誠実な評論誌が、インスブルックで出版されていることは、たとえオーストリアで知られなくとも、やはりドイツで知られるであろうし、ドイツの唯一の誠実な評論誌が、同じようにインスブルックで出されている。」(原注)] そして詩人哲学者で、道教一翻訳者であるカール・ダラゴ(1869 - 1949)なる人物も、《ブレンナー》の協力者であった。ダラゴは倫理主義的、革命主義的キリスト教の熱烈な擁護者であり、因襲的、世俗的教会キリスト教、とりわけローマ教会に対しては、激しく敵対した。トラークルをキルケゴールの著作に親しませたのも、ダラゴであったと言われている。

第一次大戦後(1919年)、トラークルがこの世を去ってすでに数年経過していたが、戦争中自発的に中止されていた《ブレンナー》小冊子は、

信仰告白と論争誌に変貌した―― 1915年の《ブレンナー》年報に、新たな精神と内容がはっきりと告げられていた――そして結局この雑誌は、宗教哲学的な、また（《実存主義》の流行語が発明されるずっと以前）実存的諸問題の解明に専心したのである。新たな目標に照準を合わせながら、文芸も厳しくふるいにかけてられ、隅にとどまった。今や《ブレンナー》が拠っていた精神的礎柱は、キルケゴール、カーディナル・ニューマン、ベルグソンだった。主な協力者は、カール・ダラゴ、テオドール・ヘッカー、フェルディナント・エープナー、パウラ・シュリーアー、アントン・ザンターそれにヨゼフ・ライトゲープだった。現代の人間の実存的問題が、ただキリスト教の光の中でだけ扱われた。それ故、この定期刊行誌は、将来のトラークル解釈にとって決定的な一つの道を取っていた。必然的な帰結だった。やはり全実存関連における詩人の意義は――その極端なはみ出し存在――何よりもまず《ブレンナー》サークル内で認識されていたにすぎず、ここから当然ながら最初のトラークル解釈者が出たのである。この《ブレンナー》で、初めて本当のトラークル育成が展開されたが、その際、マックス・ブロートがカフカ発見とカフカ解釈で占めているあの重要な地位にふさわしいのは、ルートヴィヒ・フォン・フィッカーである。

トラークルの最後期の作品は、レックの配列では、おおよそ散文詩『悪の変容』（これは『死の七つの歌』の冒頭部分に位置する）からと考えられるが、神秘的な熱情とその潜伏の最終状態を示している。事実、ことはスタツウ・テルミニ、つまり最終状態の中で受け取られている。象徴と形象の意味が、ここではただ一つのもをを表し――呪現している。死の前における《トレメンドウム》の、すなわち恐怖の体験を。これ以前のすべての作品が、後期詩作品の頂上から眺めると、単なる序曲、憂鬱の前奏曲になる。今や詩人は、最終のもの、最高のもを語ることを余儀なくされ、氷の高地へ歩み入る。そしてここでは、所々に荒々しい絶壁がそそり立っている。かなり早期の不安に満ちたささやきの調子は、力強い禁欲的な思考旋律へと変化し、パイプオルガンの高みから舞い降り、あるいは教会堂の地下室から昇り響く。構造の変化によって、同時に文体の変化が現れる――この変化は、『頌歌』『ヘーリアン』『エーリス』詩で、すでに告げられていた。バロック的なものがゴシック的なものになる。より正確には、ゴシック的なものに変化させられるのである。

疑いようもなく、トラークルは宗教的夢想家であり空想家だった。しかし麻薬中毒の精神病質者だったし、アルコールにも溺れていた。哲学者あるいは神学者は、詩人の病的存在が、確実に《死に至る病》だったにもかかわらず、この事については、ほとんどと言っていいくらい、あ

るいはまったく問いたがらない。これに反して、生の記述者に魅力あるのは、大きな心身の濫用（ここから破局が生ずる）、種々の迷い、悪癖や魔神的なものを探ることである。これは、どのみち証明不可能な思弁に逃れる形而上的な上部構造よりも、多くの興味を呼び起こすのである。宗教的体験に関しては、トラークルの言葉を取り上げながら、彼自身に問うことになる。このテーマについて、他人の仮定あるいは予言から知ることは、ほとんど無いのだから。

《悲劇的文芸史》で、ヴァルター・ムシュクは「トラークルが住んでいた逃げ道の無い劫罰」について語り、こう結論づける。「――悪の呪いのもとで、彼はおのれを失っていた。アルコール、麻薬、性の鞭、狂気が彼を荒廃させる。愛も、この刻印を受けた者にとって、妹との近親相姦以来、避けられぬ罪の意識として、彼に付きまとう墮落の一形式なのである。永劫の罰を受け、純粋なものを憧憬するこの深淵から、彼の抒情詩の単調な音楽が舞い昇ってくる。」さらに別のところでムシュクは書いている。「彼（カフカ）にとっても、トラークルにとっても、性は黒い魔術、肉の汚らわしい下劣、間違いなく救済を妨げる罫なのである。」チューリヒのゲルマニスト、エミール・シュタイガーも、ある講演で、トラークル詩作品の病的な根源をあばこうと努めたが、誤解を避けて、トラークル世界の形而上的、反啓蒙的解釈に対し、写實的、客観的解釈を優先させた。シュタイガーは、トラークル教会の代表者たちが主張する意見に反対した。彼らの意見によれば、われわれはトラークル世界の境界線までは進むことが出来るが、そのようやく背後に、本来の秘密が横たわっていると述べる。この境界線は、とシュタイガーは述べる、もはや伝達不能な孤独が始まるところを走っている。しかし伝達不能な孤独とは狂気であり、その跡を追うのは、われわれにふさわしい事ではないと。

そこでこの伝記の冒頭で、次のような問いが生じる。ゲオルク・トラークルの作品は、神学的訓練を受けた視線にのみ、あるいは――極端なことを言えば――臨床的視線よりも、むしろ前者にだけ姿をあらわす詩的神秘であるのか？言語形象に呪縛された、死の厳肅さの美は、謎を解くことが出来るのか？そして誰がその鍵を所有しているのか？

トラークルの詩的想像力は、象徴内容の閉鎖性において、童話あるいは神話と比較されるが、しかし唯一の個性の内的運命を具現しており、それゆえ全人格発展の諸関連を教えてくれるが、ほぼ神経症体系の理想像を提供している。ここで主にその体系を構成しているのは、二つの事実、すなわち天才的独創性と青年期の性的罪業である。

天才的独創性の病原学は、自己中心的本性の病原学と並べても矛盾することはない。オットー・ヴァイニンガーによれば（彼は幾度か、キリ

スト的な深い意味合いにおいて、戦後の《ブレンナー》誌上で解説されてきた)、天才的人間は、きわめて高い意識性の中において、それゆえ高揚された自我意識を所有している。全世界との意識的関連の中で生きており、あるいはそうだと思っ込んでいる。だから周囲の世界に対する異常な(過大評価的)関係、あるいは態度はかなり書き換えられている。

しかしトラークルは、ただ単に生活に対し、周囲の世界に対し、社会に対して、きわめて高い意識関係を抱いていたばかりでなく、死に対してもそうだった。晩年の思考と詩作は、黒い中心太陽—アナンケー—の回りを旋回するように、死の尊厳を巡って終始した。不安神経症によって際立っているが、しかし精神という大きな貯蔵庫で浄化された、死に対するトラークルの態度は、すでに幼年期における周囲の世界への障害的關係から説明されるであろう。奇妙な脆弱さ、作品の万華鏡性(これにふさわしいのは、《思考の映画的機構》というベルグソンの言葉であろう)、祈りにも似た作品の単調さ、病的な超地上的輝きも同じである。トラークルには、彼の自我が外界と結んでいた過大評価的關係が、自覚されていなかったのかもしれない。つまり社会的高慢は、トラークルに疎遠だった。否それどころか、晩年の同行者たちが証言しているように、きわめて低い周囲の世界に、理解と親切を捧げていた。幼馴染みであるエアハルト・ブッシュベックの発言では、トラークルはドストイェフスキーを「総力を傾けながら、早くから読み始め、間もなくすべてを知り尽くした」が、ドストイェフスキーは周囲の世界に対し同様の姿勢をとっていたし、小説の人物たちの多くにも、類似の諸特性を賦与していた。例えばムイシュキン公爵である。概して、トラークルはドストイェフスキーの人物の何人かは、半ば、あるいはすべて走り読みしていたように見える。例えばラスコールニコフ、次いでイヴァン・カラマーゾフ、特にシャートフ、しかしスタヴローギンやキリーロフすらも。カラマーゾフ兄弟の一番末の弟アリョーシャについては、ハンス・リンバッハが報告しているように、トラークルは「深い感動を込めて」語ったのである。ほとんど例外なく、特別の不安関係あるいは依存関係(この関係は《神の畏敬》としても定義される)に押し込められた神経症的人物たち、彼らは、重い異常心理によって危険に曝されており、一人残らず死への「親密な」関係を持っている。彼らは—キリーロフも—いわゆる正常人よりも、ずっと強烈に死を恐れている。彼らの悲劇は正真正銘あきらかたで、耐えがたいものである。つまりわれわれは、古代的意味における悲劇的人間に直面しており、その一人が、肉体と魂を持ったトラークルなのである。トラークルの場合、すべての本質的生活領域を包み込みながら、深い影を帯びる憂鬱(ペシミズム、自己叱責、絶望、行動の抑制)の中に、生の不安や死の恐れが現れるばかりではな

い。付帯的な事柄、現実的な、奇妙に「实际的」反応にも、この不安が感じられるようになる。アドルフ・ロースに宛てた手紙で、「いつか仮死者として葬られるかもしれぬという心配から、場合によっては、自分の遺体の心臓を刺すことを実施してもらいたい、という望みを述べた」（フィッカー）ことが、その例である。

躁鬱的な天賦の才に恵まれた者は、通常の神経症患者とは比較できない恐ろしい程度で、死の確実さを体験する。神経症患者にとっては、大抵ただ発作的に、心気症的、飛躍的悪化の中で、心配、脅迫、宿命として認識されるにすぎないが。トラークルには死への強い欲求があったのかどうか――彼を扱った心理学的解釈、哲学的解釈（ヴァルター・リーゼ、エヴァ・フェルッカー、テオフィルとテオドール・シュペリ、ハインリヒ・ゴルトマンその他）は、それを避けてはいないが、決して直ちに肯定できることではない。彼の生活では確かに、「半ば真面目に考えられた自殺の試み」に欠けてはいなかった。底深い麻酔の深淵と、快感の高度の陶酔へ代わるがわる赴くには、あるいはテオドール・シュペリも書いているように、「死と生のどちらをも明確には欲せず、しかし両方への可能性をつくりながら」死と生の間の刃の上でバランスをとるには、モルヒネ、ヴェロナール、クロロホルム、阿片、コカイン（それにメスカリン？）を、どれくらい摂取しなければならないかを、トラークルは薬剤師として知っていた。ムシュクも同じ意見を述べている。「何れにせよ、トラークルは、不気味なほど多義的な意図から毒物を必要とした。意識状態を変えるために、苦悩に満ちた幻覚を忘れるために、また意識的な自己破壊のために。」

トラークルには、天才的被造物固有の死の恐怖から、全時代に対する没落の予言にまで高揚された、過度とも言える陰鬱な心情が、震憾するような罪の感情と満足することを知らぬ苦行欲求で、重なり合っているのが、われわれの目にとまる。そしてたとえこの心情が、カフカのそれのように、自己懲罰の空想的体系、知恵を絞りながら考え出された懲罰幻覚の迷宮にまで、発展させられていないにしても、やはり思春期後のトラークルの生活は、この心情によって特徴付けられるのである。トラークルの罪と贖罪欲求は、性の深い疑惑から由来している。

トラークルは近親相姦的結合を耐え忍んでいた。その問題の人物は、グレートルと呼ばれる妹マルガレーテだった。彼女は内面的にも外面的にも、人相学的にすら彼と似ていた。〈おお 欲情よ 彼が縁にむせぶ夏の庭で黙せる子に無法を強制し 輝くその子の顔に おのれの狂気の顔を認めたとときよ〉。伝記の枠内では、この関係を誇張してはならぬし、トラークル世界が周囲を巡る唯一の軸点とすることも許されない。しかしまた形而上的な煙幕を張り巡らす試み、あるいはむしろ修正し去る試

み、すなわちシュペリのトラークル研究（『ゲオルク・トラークル、個性と作品における構造』）を、例えば次のように論評したエドゥアルト・ラッハマン博士と同じように語ることも、許されないのである。「トラークルの詩作品にとって、近親相姦があったかもしれぬというのは、重要なことではない。トラークルの罪の感情は、個人的罪以上のものに基づいている。お互いの性の関係は、神からの離反として受け取られる。それは樂園で犯された人類の原罪であり、無垢の状態へ帰還する希望は、ひとつの性への希望、すなわち二つの性の止揚への希望と結び付いている・・・」ここでトラークルと祖先の罪業（ペッカトゥム・プロトパレントゥム）について述べられていることは、旧教的教義学の案内書から取り出されたものであろう。トラークルの形象世界には、いたる所で聖書的概念が見いだされるが、これは、子供の宗教教育、生家の雰囲気、それにルター聖書の言語威力と関連がある。ラッハマンによって強調されたひとつの性への詩人の希望〈輝く青年となって 妹が現れる・・・だが輝きながら 愛するものたちは銀色の臉をもたげる――ひとつの性となって・・・〉は、例えば、すでに以前（バイエルタール、1926年）ヘルマフロディズムとして解釈されたが、同様にわき道へそれているという気持ちにさせるのである。何れにしろ、トラークルの過ちは、《原罪》とはなんの関係もないし、比喩的に関係があるということも決してないのである。

人々は、こわごわしながら、トラークル心情の最も私的領域へ足を踏み入れるが、ここでは嫌悪してみても始まらない。というのも天才にとっては、もともと久しい以前から穴だらけになっている市民世界の性的タブーとは、別の合法性が当てはまるからである。そしてこの情熱の運命的強迫に直面すれば、やはり道徳的反応は許されないであろう。他方、トラークルの情念のまさにこの根底を掘り起こす学者たちの努力において、「この上ない不謹慎さ」「創造的人間の臓腑を抜き出すこと」（イグナーツ・ツァンゲルレ）は、問題にならない。トラークルは妹と二人のヴィーン時代、なるほど妹を麻薬へ導き、妹の健康をひどく損ねたが、しかし彼女は生まれつき、不安定な、衝動に駆られる、半ば魔神的、半ば天才的、半市民的女性で、性的関係においては、おそらくより積極的だった。トラークルの詩作品の空間では、今やこの本性は、犠牲像として、偶像として、深淵的ではあれ、健全で、聖なる、そこから救済が招来するかもしれない形姿として、われわれに姿を現す。われわれに知られているところでは、現実には違っていて、妹はゲオルクの歪んだ像として示される。そこでエルヴィン・マールホルトが、最初の偉大なトラークル研究論文のひとつは（1924年）彼のおかげだが、こう述べているのは正しい。「トラークルは妹の中に、ただただ、不安定極まる女性的

なものへ押しやられる自分の似姿を見つけた。だから、妹が鏡に浮かび出ると震えあがり、あるいは炎のような魔神として、彼の秋の中に姿を見せると魅惑されるのである。」

トラークルのグレーテに対する関係は、ずっと以前の早い時期にまで遡ることが、推測されるであろう。〈・・いくども彼は幼時を思いかえた・・星の光る庭でのひそかな遊び・・青い鏡の中から妹のほっそりした姿があらわれ 彼は死んだように闇へ転落した・・〉それ故、精神医学者たちによって想像されたように、ようやく思春期から、あるいは思春期後の遅い時期に始まるのではない。この関係から、嘔吐（早すぎる、あるいは暴力的合一ゆえに）、羞恥、発見される不安、追放と罰の恐れといったこの全く似非小児的コンプレックスが、解明されるであろう。このコンプレックスは、なお成熟期にも、しかしその時には全体的、一般的、予言的事柄にも振り向けられ、性的なこと（セクスウス）から種族（ゲヌスまたはゲネラチオ）へと押しやられたが、トラークルの詩作品を闕下で規定している。そこへなお、禁じられていること、《反自然的なこと》を行ったし、さらに行うに違いないという、まさしく罪の感情が付け加わる。トラークル固有の概念世界には、しばしば反復される嘔吐を催すもの、または諸形象が満ちているのが、目に止まる。〈・・ひきがえるの沼で・・鼠たち・・陰鬱な臭気・・腐敗・・血の斑点のついた亜麻布・・癩病者・・運河が突然脂肪のような血を吐く・・汚穢と疥癬に満ちて・・蛆虫がしたたる・・汚物が固まって・・汚穢でこわばった髪・・汚水を腐朽したものが駆ける・・糞尿と蛆虫でこわばったような髪・・汚物の中を鼠がうごめく・・糞尿で汚れた衣服・・・癩が銀色に発生した・・腐敗する人間・・脂肪ぶとりの鼠にかじられて〉等等など。だが、この不潔で、厭うべき物の命名（あるパロック詩人あるいはランボオのコプラ化を思い出させるが）には、子供時代にあるように、歓喜を強調するものは全く何もないし、幼稚症や精神薄弱に現れるような物ほしさもない。それどころか、何か《聖なる畏怖》があり、物質の腐敗を表示している。トラークルの前期詩における不純なものの反復は、ただ退廃的気分描写や墮落に対する媚態にすぎないことが多いが、成熟期と後期詩作品では、まさしくこれによって、畏怖すべき真実なもののほのかな気配が、われわれに姿を見せるのである。

[トラークルの詩作品からの引用は、平井俊夫訳『トラークル詩集』（筑摩叢書 100 1967年初版）、吉村博次訳『トラークル詩集』（彌生書房 世界の詩 51 1968年初版）、中村朝子訳『トラークル全詩集』（青土社 1983年）を参考にした。またマルティン・ハイデッガー『詩と言葉』三木正之訳（理想社 1967年）も参照した。]